

## 『杞憂』

むかしの中国での話。

杞という国に、こんな人がいました。その人は、

「天が落ち、地がくずれ、自分の居場所がなくなったらどうしよう？」  
と不安になるあまり、夜もねむれずに、ごはんものどを通らずにい  
ました。

そこで、心配する人を心配した人がやってきて、こう言いました。

「天はね、ふわふわとした気があつまつてできたものなんだ。それ  
に、気のないところなんてないんだよ。体を伸ばしたり縮めたり、息  
を吸ったり吐いたりなんてことは、いつだってぼくらはその天の中  
でしているわけだけど、現にほら、天は平気じゃないか。それなの  
に、今さら天が落ちてしまうつてのかい？」  
と。

心配する人が言いました。

「そうか。天は気のあつまりか。だとしても、日や月や星は落ちて  
こないだろうか？」

と。

説明する人が言いました。

「日や月や星はね、ふわふわした気の中をただよう、ただの光さ。

当たったところで、いたくもなんともないよ」

と。

心配する人が言いました。

「地がくずれるのは、どうしよう？」

説明する人が言いました。

「地はね、土があつまってできたものなんだ。それに、どこまでもいつぱいにつまっていた、かたまりでないところはないんだよ。歩いたり踏んだりなんてことは、いつだってぼくらはその地の上でしているわけだけど、現にほら、地は平気じゃないか。それなのに、今さら地がくずれてしまうつてのかい？」

なやみがすつきりして、心配する人はとてもよるこびました。説明する人もすつきりして、とてもよるこびました。

この話を聞いて、長廬子という学者が笑いました。そしてこう言いました。

「虹も、雲も、霧も、風も、雨も、季節のうつろいも、どれも気のあつまりが変化して天に生じておるのじや。山も、丘も、川も、海も、金属も、石も、火も、木も、どれも土のあつまりが変化して地に生じておるのじや。天が気のあつまりで、地が土のあつまりであることを知れば、どうして天地はこわれなどと言えるじやろつか。

天地は、宇宙にくらべたら、ちっぽけなもの。じやが、形のある

ものの中では一番大きなものじゃ。どこが終わりではしつこか、はかってみることも知ることも、とほうもなく、むずかしい。とうぜんじゃ。じゃが、それがいつこわれるかを心配するのは、(せいぜい百年ぐらいしか生きられない人間にとっては) 話が大きすぎるし、かといって、『天地は絶対にこわれません!』と言われても、『はい』とはうなずけない。天地も不死身ではないのなら、いつかはこわれてしまう時がこよう。その時になったら、心配せずにはいられまい」

この話を聞いて、列子という人は笑いました。そしてこう言いました。

「天地がこわれると言ってしまうのもまちがいだろうし、こわれないう言ってしまうのもまちがいだろうな。こわれるかこわれないか、それ自体が、わたしにはわからないことだよ。『こわれる』というのも一つの意見ではあるし、『こわれない』というのも一つの意見ではある。けれどね、しよせん、生きているあいだは死ぬことがわからないし、死んでしまったら生きていることがわからない。未来には過去のことわからないし、過去には未来のことわからない。だから、天地がこわれるかこわれないか(また、その時がいつかなんで、わたしにはどうでもいいことだと思えるよ)」

出典：列子『天瑞』

(福西／訳)